

文明生活の闇を ひらくとは

本多弘之

bonda hiroyuki

啓

メキシコに留学している娘からの便りに、生まれて初めて夜空の銀河を見て感動した、とあった。かねて、都会の夜空には星が少ないとは思っていたが、東京の真ん中で育った娘にとっては、銀河に触れる機会がまったくなかったのだと、あらためて知らされた。

ドイツの哲学者カントが「畏敬するべきものに、二つある。一つは、夜空にまたたく星座であり、もう一つは、人間の内なる道徳律である」と言っているが、これが近代の人間情況を見事に表している。人間の理性が、人間を取り巻く一切を了解できるものの内に取り込み、それを自己に役立つものに造り替えていく知恵をもった。観察と実験で、自然

の持っている原理や力を、人間理性の能力の手足にするようになった。しかし、夜空の星座に代表される大自然界の美しさは、人間の外にある「畏敬する」ほかないものではあった。その自然界の大震災や大水害などの現象に対して、知恵や知識が足りないために徒に恐怖する大衆に、自然の因果を分析し、人間の持つ畏敬するべき内なる「自律性」を示して、見えない恐ろしさを理解して見えるよう

に「明るくする」(enlighten) ことが、近代啓蒙主義となったのである。

そして、その結果、理性による自然界の「征服」が進められ、人間の「自由」(生活の便り、移動のための乗り物や仕事のための機器

の利用など)の伸張に、歯止めがないような拡大が想念されてきた。限りなく人間が「進歩・発展」するという「妄念」がはびこってきたのである。

しかし、数十年まえから、すでに識者によって、エネルギー資源の枯渇や、過度の収穫本位の農業がもたらす水不足や、物質文明を支える物質の原材料の浪費が、案ぜられ、危機の到来が予言されていた。それに加えて、消費過剰の生活ゴミ・産業廃棄物・排気ガス等々の、豊かさの追求から生ずる処理困難な問題が押し寄せてきたのである。

こういう情況になってみると、人間の理性によって、自然の恵みを自分の好きなように利用し、生活を豊かにするということが、それのみでは済まされない、人間と自然との関係の犯してはならない分水嶺なすわけのようなもの。自覚が、論議されなければならぬ時となったのではないかと思う。

つまり、理性 (reason, Vernunft) は人間存在にとつて、特に、近代以降の人間にとつては何よりも重要不可欠のものであり、「理性」こそ、神が人間に与えた神に近い特徴であるように振る舞ってきた。そしてその理性が、人間の意識の対象物を人間に役立つように、造り直し、配置し直して、この地球空間を人間的空間にしてきたのである。その結果、自然の営みが悠久の時間と共に、一切の存在に

それぞれの役割を分担してきた静かな流れを、人間的な短時間の効果に有効か否かで、改廃しようとするような騒々しい無理(理性のないこと)をすることになったのである。すなわち、理性といつても、大自然のおおきな流れを無視することは、人間の能力の限界を知らないことではなかったのである。

ところが、近代科学は、理性の営みとして、いわばこの限界への飽くなき挑戦をしかけているところがある。ノーベル賞を受賞した原子物理学者の朝永振一郎博士が、「科学の結果として原子爆弾という罪悪が生まれたというよりも、そもそも科学するということに人間の罪があるのではないか」ということを書いておられた。自然界の物質を人間の理性が見いだした合理性で改変して、自然を破壊するような莫大なエネルギーに転換するという原子力の原理を見いだしたことは、そのまま「便利さ」と同居する「自然破壊」の罪を生み出すのである。そして、その利用の仕方ひとつで大量殺戮兵器ともなるわけである。

こういうことに気づいてみると、人間存在の罪悪性は、理性の営みと共に深いのである。理性が明るみをもたらすと見えた近代文明は、中世の無知蒙昧もうまいな大衆に対して、確かに人間的な自由がある程度、啓ひらいてきた。しかし、この人間的自由なるものに、実は見えざる闇が付帯していたことを、知らされるのである。

だから、現代生活の明るみには、人間存在の深い暗黒が潜んでいるのである。

東京の南西に「丹沢」という山塊さんかくがある。だいぶ以前のことではあるが、真冬にこの山に登ったことがあった。小田急線の「松田」という駅から、真夜中に登り始めて、山頂の小屋に着くころ、まだ夜明け前の関東平野が一望にできた。ちょうど恒星こうせいのまたたきのように、首都圏・東京を取り巻く街の電灯が、約一〇〇キロ四方に広がっていた。あたかも全面にオパールを敷き詰めたかのような色とりどりの電光の美しさが、遠い夜空の暗さに挑戦でもするかのように輝いていた。その壮大な無駄。ほとんどの人々が眠りについているのに、ちかちかと山道を星空が照らすごとくに、足元が見える程度に照らしてくれていたのである。

現代生活の暗黒とは、人工の明るさによって、文明の明るさにして、天然の闇を消してしまっているところにあるのではないか。村上春樹氏が言うところの、地下に住んでいて人肉を食らう空想上の魔獣「やみくろ」とはこの理性が生み出す暗黒の象徴なのではないか。我らは、それに気づいて文明の明るみこそ人間の深い闇であることを、真実の智慧ちえの光明をもつて照らしださなければならぬのであろう。

(ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長)